

『門』の御米

——満韓旅行の副産物

藤井 淑 禎

一

本稿は『大衆文化』第十号（二〇一四・三）に発表した「夏目漱石『門』の御米について」を大幅に増補したものである。恥ずかしながらその時はまったく考慮の外にあった重大な事実とその後気がつき、それとの関連で考えなくては『門』の御米論は完結しないと思うようになった、というわけである。

もつとも、「考慮の外にあった重大な事実」といつても、いわゆる新資料とか新事実とかいったようなものではなく

い。少し漱石に関心のある方なら誰でもが知っている、『門』連載（一九一〇・三・一〜六・一二）の前年に試みられた例の満韓旅行（一九〇九・九・二〜一〇・一七）がそれだ。したがって私とて人並みの知識は持っていたわけだが、『漱石紀行文集』（二〇一六）の編集・注解・解説を担当し、「満韓ところどころ」の注解作業をするまでは『門』との（正確に言えば『門』の御米との）関連などは考えもしなかった。

結論から言えば、サブタイトルにもあるように『門』の御米は満韓旅行の副産物であったと今は考えているのだが、以下、旧稿を踏まえながらその仮説を推し進めていく

ことにしよう。

旧稿では、『門』には二つの大きな特徴があることから考察を始めている。どちらも決して珍しい指摘ではないが、一つは、主人公の宗助・その妻御米・旧友安井の三者をめぐるいわゆる「徳義上の罪」事件の全貌が読者に示されるのが、全二十三章中の十四章の十（ページ数でいうと、岩波の九四年版全集で全二六三ページ中の一八七ページ目）においてであるという、真相を極端に後出しする特異な筋の運びであり、もう一つは、その御米に関する作中の情報が極端に少ないという点である。

前者については近年私が口をすっぱくして提唱し続けている（読み進み解釈）が重要であることを説いた。

ここ二、三〇年で、作品とは読者がつくるもの（『読書行為によって現前してくるもの』との常識こそ広く共有されるようになったものの、読書行為によって読者が作品をつくる、といった時、厳密に言えば、その、読書と作るとの関係が、読者が読み進むにつれて作品が徐々に形をなしていく、読み終えた時点で最終的に作品が完成する、と考へなくてはならないことまでは、十分には共有されなかったように思う。

この読み進み解釈の反対が、読み終えた地点から振り返って作品を概観する（振り返り解釈）で、たいていの作品論はこのタイプに属する。要するに作品を完成品として静的に捉える立場だ。これに対して読み進み解釈は、作品を徐々に出来上がりつつあるもの、動的なものとして捉え、説明（解説、分析）する。

したがって『門』のような真相を極端に後出しする特異な筋の運びの作品の場合は、特に、「読み終えた地点から振り返って作品を概観する」のではなく、真相暴露を先送りし続ける作品の進行に同行してそれを辛抱強く見守り、その都度説明（解説、分析）を加えていくような読み方（読み進み解釈）が強く求められる。有名な正宗白鳥の論（夏目漱石論）『中央公論』一九二八）などはその代表的な実践例だ。少し長くなるが、紹介してみよう。

はじめから、腰弁夫婦の平凡な人生を、平坦な筆致で淳々と叙して行くところに、私は親しみをもつて随いて行かれた、この創作態度や人間を見る目に於て、私は漱石の進境を認めた。——さう思つて読んでゐた。ところが、しまひの方へ近づくと、この腰弁夫婦は異

常な過去を有つてゐることが暴露された。私は、旧劇で、鱗七が引抜いて金輪五郎になつたのを見るやうだつた。安官吏宗助実は何某と變つて、急に深刻性を發揮するのに驚かされた。友人の妻を奪つた彼は、「それから」の代助の生れ變りのやうな氣がした。さう云へば、はじめから、何かの伏線らしい變な文句がをりをり挿まれてゐたのだが、他の小説とはちがつて、『門』にはしみじみとした、銜氣のない世相の描写が続いてゐたので、私は、それだけに満足して、貧しいやえない腰弁生活の心境に同感して、變な伏線なんかをあまり気にしなかつたのであつた。それほど従順な讀者であつたために、後で作者のからくりが分かる、激しい嫌惡を覺えた。宗助が正体を現はしてからの心理も一通り書いてゐるには違ひないが、真に迫つたところはなかつた。鎌倉の禪寺へ行くなんか少しふざけてゐる。(後略)

実況中繼的に、読み進むにつれて感じたことや考えたことが率直に述べられている。読み進み解釈において重要なものが、この、読み進んで行く過程での讀者の反応(驚きや

落胆や感想)なのであり、それらを説明に取り込んでこそ、作品は(徐々に出来上がりつつある)動的なものとして捉えられ、われわれの前にその全貌を現す。そしてこの読み進み行為の結果としてゴール地点で明らかとなるのが、過去を伏せておいてあとで「前歴を明かす結構」(社本武「『門』」『国文研究』一九七八)とか、「冒頭と結末とが絶妙に照応している作品」(酒井英行「『門』の構造」『日本文学』一九八〇)とかいった概観的なまとめなのであり、最初からここに行けるわけではないし、これだけいいわけでもない。概観的まとめと読み進んで行く過程での説明とは一体となつて、あるべき作品論を構成するのである。

二

以上は『門』の二大特徴の一つである特異な筋の運びをめぐる考察だが、本稿で問題化したいのは前述のように、御米に関する作中での情報が極端に少ないという、もう一つの特徴のほうである。まずはその少なさの実態を確認しておこう。

御米に関するかすかな情報としては、東京が生まれ故郷とあるが（十一の一）、安井によれば「横浜に長く」（十四の七）いたことにもなっている。安井と京都に来る以前の御米に関する情報はこの程度であり、何よりも不自然なのは、宗助との恋愛事件の以前も以後も御米のまわりに親姉妹の影がまったく見られないということだろう。東京で出産（ただし死産）した折にも（十三の六）、急病のあと葉のせいで長く目覚めなかった折にも（十一の一〜十二の二）、縁者が見舞いに来た気配はない。結婚とか引越した際も同様である。

この点に関して前掲の社本論は、「お米の描写が不足」であるとか、「前歴描写が一切なく」「前半生は全く不明」なのは「不可解」であるとか、宗助と御米が親親類を捨てた後（十四の十）、「お米の親や親類は、その後の六・七年間どうなったのでしょうか」、などと疑問を投げかけている。同様に御米の過去を問題視しているのが玉井敬之の論（『門』――過去と現在のドラマ）『国文学』一九九二・五など。『漱石 一九一〇年代』所収、二〇一四）で、御米の罪は、安井への裏切り以外にも、安井と出会う以前に何かあったのではないかと想像をめぐらしつつも、結局それは

書かれることはなかったとしている。これらの指摘に対して私に特段の異論があるわけではない。それより私に気になっているのは、この点をめぐる作者側の理由と、読者側の反応のほうなのである。

もちろん、それらはしよせん推測の域を出ないかもしれない。作品論が感想や推測を禁じ手とするようになってからずいぶん経つが、だからといって、こんなに大きな特徴について、当然あるはずの「作者側の理由と、読者側の反応」を不問に付していいわけがない。慎重な物言いでも、かつ推測であるとの留保つきで、何らかの推理をしたり想像したりする必要があるのでないだろうか。

作者側の理由については後段で考えるところとして、いったい読者のほうは、こうした御米の描かれ方（正確に言えば〈描かれなさ〉か）に対して、どのような思いを抱いたであろうか。前述した情報不足や不自然さに違和感を抱いたであろうことは、当然予想される。しかし、情報不足である半面、特に恋愛事件前後の部分には、御米に関して書きこまれた情報も少なくない。それらを整理し、総合して、そこに推理を加えることによって、読者が御米という女性をどのような女性として見ていたかについて、ある程度確度

の高い想像をすることは可能なのではないだろうか。

恋愛事件前後の部分の御米に関する情報中には、実は特徴的なものが少なからず含まれているのである。たとえば、宗助が二度目に安井宅を訪ねた折に初めて紹介された時の御米の態度は、次のように描写されている。

是から余所へ行くか、又は今外から帰つて来たと云ふ風な粧をして、次の間から出て来た。宗助にはそれが意外であつた。然し大した綺羅を着飾つた訳でもないので、衣服の色も、帯の光も、夫程彼を驚かさ迄には至らなかつた。其上御米は若い女に有勝の嬌羞といふものを、初対面の宗助に向つて、あまり多く表はさなかつた。たゞ普通の人間を静にして言葉寡々に切り詰めた丈に見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでゐる時と、あまり区別のない程落付いた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、御米のひっそりしてゐるのは、穴勝恥かしがつて、人の前へ出るのを避けるため許でもなかつたんだと思つた。(十四の七)

「若い女に有勝の嬌羞といふものを、初対面の宗助に向

つて」さえ、さほど見せない、「落付いた女」。そんな御米と、一年も経たないうちに、「二人は漸く接近し」、「冗談を云ふ程の親みが出来た」(十四の八)。そして、出会つて一年が経つた秋の頃の出来事として、もう一つ特徴的なことが、描かれている。

或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に残り残された様に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢の両側に手を翳しながら、思つたより長話をして帰つた。或時宗助がぼかんとして、下宿の机に倚りかゝつた儘、珍しく時間の使ひ方に困つてゐると、ふと御米が遣つて来た。其所迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして帰つた。(十四の九)

一度は安井の部屋で、そしてもう一度は宗助の部屋で、宗助とお米は二人だけの時間を持ったというのである。この時代においてこうした振る舞いがタブーであつたことに

ついで、私は『漱石全集 第八卷 行人』（一九九四・七）の注解や、『漱石文学全注釈 12 心』（二〇〇〇・四）の注釈で、当時のマナー本だけでなく一般人の回想なども根拠として、論証している。

二二

「若い女に有勝の嬌羞」も見せず、一室で若い男性と対座することをも何とも思わないような御米という若い女。そしてその挙句は、安井を裏切つて宗助と駆け落ちまでするような女。安井と一緒にいる以前の情報量の少なさとは裏腹に、ここ（宗助と暮らし始める以前）での読者の目に映る御米像は、意外に鮮明な像を結んでいるのである。

ここで、「読者の目に映る御米像」にたぶんに関係する「妹」問題、すなわち安井が御米を宗助に紹介する際に「是は僕の妹だ」（十四の七）と言ったことの意味について、念のため確認しておこう。西垣勤は『漱石作品論集成 第七卷 門』（赤井恵子・浅野洋編、一九九一）に収録された「門」（一九六五）において、宗助は安井の「妹」と思っていた御米と「衝動的に結ばれてしまった」ので

あって、そうであればこれは「姦通」にはあたらず、そこに『それから』の代助との大きな違いがあると指摘している。この指摘を同書の巻末鼎談で浅野洋は支持しており、この指摘が「どうしてその後踏まえられていかないのか」と疑問を投げかけている。

しかし、結論を先に言えば、西垣の指摘は一種の勇み足に過ぎない。紹介の場面の直後の「十四の八」で、宗助は、「妹だと云つて紹介された御米が、果して本当の妹であらうかと考へ始めた」とあるからである（この点については玉井論を始めとして従来も指摘がある）。宗助がそんなふうに思うのも当然で、当時は異性の相手を兄妹や従兄妹と偽って紹介する（特に最初とか、疎遠な相手に対して）のはよくあることであつたからである。床の中でそのことについて思いめぐらし始めた宗助だが、「此疑の解決は容易でなかつたけれども、臆断はすぐ付いた」と記されている。このあと数行ばかり臆断をめぐつての記述があるが、臆断の内容が、妹であるはずはない、であつたことは動かないのではないか。この部分に関して、『漱石全集 第六卷 それから・門』（一九九四・五）にも『漱石文学全注釈 9 門』（二〇〇一・三）にも的確な解釈が見ら

れないのはどうしたことだろうか。こうした個所こそが注解や注釈の腕の見せ所であろうはずなのに。妹問題は直接的には宗助側の問題（姦通にあたるのかどうか）だが、それでも、読者が御米をどう見ていたかとも密接にかかわるので、あえて確認しておく。

繰り返し返せば、「若い女に有勝の嬌羞」も見せず、一室で若い男性と対座することをも何とも思わず、その挙句は、安井を裏切つて宗助と駆け落ちまでするような女。それが読者の目に映つた御米像（宗助と暮らし始める以前の）だったのである。

この点についてのさらなる考察は後回しにして、今度はそうした御米と安井はどのようにして知り合い、京都で暮らすに至ったのかについて考えてみることにしよう。この点に關しても、作中での記述はさほど多くはない。当初断つておいた通り、慎重な物言いを中心、推測であれば推測であるとしたうえで、可能な範囲で、何らかの想像をめぐらしてみようというのである。

宗助は「ある事情のために、一年の時京都へ転学」（四の三）して、そこで安井と知り合った。その安井について、「十四の二」では、「よく何処かに故障の起る」、すな

わち体が虚弱であり、「国は越前だが、長く横浜に居たので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点がなかつた」と紹介されている。そして問題の夏休みとなるわけだが、その前後の二人のやりとりを以下に抜き出してみよう。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分つた。安井は一先郷里の福井へ帰つて、夫から横浜へ行く積りだから、もし其時には手紙を出して通知をしよう、さうして成るべくなら一所の汽車で京都へ下らう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くり遊んで行かうと云つた。宗助は大いに可からうと答へて、腹のなかでは既に安井の端書を手にする時の心持さへ予想した。（十四の三）

これが夏休み前の状態だが、「立秋」となり「二百十日」となり「京都へ向ふ支度をしなければならなくなつ」（十四の四）ても、安井からの連絡はなかつた。

彼は此間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。

家へ帰つた当座は、まだ二ヶ月も先の事だからと緩く構へてゐたが、段々時日が逼るに従つて、安井の消息が気になつてきた。安井は其後一枚の端書さへ寄こさなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事は遂に來なかつた。宗助は横浜の方へ問ひ合はせて見やうと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、何うする事も出来なかつた。(同前)

安井と横浜との関係もしよせん憶測の域を出ないが、福井が安井家の出身地で(もと福井藩士?)、父なり祖父なりが横浜に出て商売を始めたか、あるいは役人として横浜在住で、そこで安井も育つた、というところあたりが、比較的容易に想像できることではないだろうか。さて、そんな宗助のもとに、ようやく待ち焦がれていた安井からの手紙が届いた。

愈立つと云ふ間に、宗助は安井から一通の手紙を受取つた。開いて見ると、約束通り一緒に帰る積であるが、少し事情があつて先へ立たなければならぬ事

になつたからと云ふ断を述べた末に、何れ京都で緩くり会はうと書いてあつた。(十四の五)

仕方なく宗助は一人で興津や三保を回り、安井に絵葉書を送つたりしたもの、結局退屈を持て余して、早々に京都へと帰ってくる。九月上旬のことである。ところが「不審な事には、自分より三四日前に帰つてゐるべき筈の安井の顔さへ何処にも見えなかつた」(同前)。そこで郊外の安井の下宿を訪ねてみると、意外にも、安井は「郷里へ帰つてから当日に至る迄、一片の音信さへ下宿へは出さなかつた」ことをそこで教えられる。

それからの一週間ほどは、大学に行くたびに気にかけてみたものの、会うことはできなかった。次第に宗助は「早く安井に会ひたいと思ふよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、何時まで待つても影も見せない彼の安否を、関係者として寧ろ気に掛け」るようになる。学友にも尋ね回つたところ、一人だけ、「昨夕四条の人込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見た」という者がいた。宗助にはとても信じられない話だったが、その「話を聞いた翌日、即ち宗助が京都へ着い

てから一週間の後、話の通りの服装をした安井が、突然宗助の所へ尋ねて来た」（同前）のだった。

「着流しの儘麦藁帽を手に持った」（十四の六）安井の顔には、「夏休み前の彼の顔の上に、新らしい何物か、更に付け加へられた様な気がした」。安井の上に、何らかの變化を宗助は見取ったのである。そのうえ彼は「何故宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた」。「又途中何処で暇取つた為、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。然し彼は三四日前漸く京都へ着いた事を明かにした。さうして、夏休み前にゐた下宿へはまだ帰らずにゐると云つた」。しかもいまは三条辺の三流の宿屋に居ると言い、近々小さい家でも借りるつもりだとも言う。そうしてこの「思ひがけない計画」は「宗助を驚かした」。家を借りるのは結婚とか就職を待つてするのが当時の常識だから、当然の反応と言えよう。それから一週間ばかりうちに、安井は言葉通り、「学校近くの閑静な所に一戸を構へた」。宗助は九月末に初めてここを訪れた際に「粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認め」、そして一週間ばかり経つた二度目の訪問時に、前述のように「是は僕の妹だ」と御米を紹介されたというわけである（十四の七）。

このあとの展開は周知のように、徐々に交わりを深めていくなかでの一年後の三人での秋の茸狩り、インフルエンザを患つて御米とともに転地していた安井の滞在先を訪問、そしてその後の、京都に帰つて春の初めから終わりにかけて宗助と御米を吹き倒した「大風」の記述へと続いていく。この、大風に吹き倒されたあたりの経緯がいまいであるとの批判は『門』論の常套となつているが、本稿の関心は読者が御米をどう見ていたかのほうにあるので、それと密接にかかわつてくる安井と結びつくまでの経緯について、書かれてあることを手がかりとして大胆に想像をめぐらしてみることにならう。

四

いったんは郷里に帰つたはずの安井はいつ横浜にやつてきたのだろうか。そして宗助よりも先に発つたとしたならば、京都の四条で学友に目撃されるまでのあいだ（目撃の翌々日に、一週間前に京都に着いた宗助と再会し、その三、四日前に京都によく着いた、と言っている）、安井はどこにいたのだろうか。愚を承知で計算してみると、

安井が「先へ立」った数日（？）間、宗助が興津あたりをうろろした後に京都に着くまでの数日間、そして宗助が京都有着後の数日間の合計が、安井（と御米）がどこかを周遊していた期間と想像される。もう一つ言えば、「三四日前漸く京都へ着いた」と言う時の「漸く」にはどんな意味が込められていたのか。そしてその間、御米ともずっと一緒だったのかどうか。

書かれてあることの範囲を逸脱しないようにすれば、わかることはこの程度だが、ここに穏当な想像を加えて、安井の行動を推理してみることがそれほどむずかしくはない。安井が御米とどのようにして知り合い（旧知なのかどうか）、深い仲となったのかは不明だが、友人との約束を反故にするほどの必然性のもとに、一週間から場合によっては十日以上をどこかで御米と過ごした後、京都に戻って来たことはほほまちがない。そして、その後の御米の身の振り方を見る限り、多くの論が指摘することくこれが一種の駆け落ちのようなものであったことも。

ここで考え合わされなくてはならないのは、御米に関する前述の二つの特徴である。一つは、御米のまわりに親姉妹の影がまったく見られないということであり、もう一つ

は、「若い女に有勝の嬌羞」を見せないばかりでなく、一室で若い男性と対座するのも気にせず、果ては夫を裏切ってその友人と駆け落ちまでするようなタイプの女性であったということだ。前者は駆け落ちゆえと解されなくてもないが、東京が生まれ故郷であり（十一の一）、すでに長い期間経っていることを考えれば、極端な疎遠ぶりとも言える。ここまで疎遠となるのはどのような場合なのか。

さらに、もっと決定的なのは後者の特徴のほうで、ここから読者が想像するのは、御米が素人の女性ではなかった可能性ではないだろうか。そう考えれば、親姉妹との極端な疎遠ぶりも納得がいくのである。安井によれば御米は「横浜に長く」（十四の七）いたことになっている。旧知なのか、この夏に出会ったのかまではわからないが、安井は横浜で玄人の女性である御米と恋に落ち、駆け落ちに及んだのではないだろうか。一週間から場合によっては十日以上の周遊は、二人にとって逃避行でもあれば（「漸く」と関連づけることもできる）、一種のハネムーンでもあったにちがいない。

もちろん、遊廓などの娼妓であれば足抜けは容易でないだろうが、銘酒屋のたぐいに勤める女性と考えれば、駆け

落ちもむずかしくはない（だろう）。横浜という場所にこ
だわれれば、有名な「チャブ屋」なる一種の銘酒屋の町もあ
る。——以上は頑なな漱石信奉者の目には一見たわ言のよ
うに映るかもしれないが、前述の二つの特徴（親姉妹の不
在、男性に対する物怖じの無さ）と安井・御米の不可解な
結びつきとに基づいて、読者の目に御米はどのような女性
として映っていたかについて推理を推し進めていくと必然
的にこのような結論となる、ということを書いたに過ぎな
いことを念押ししておきたい。

五

ところで『門』執筆の半年前に試みられた漱石の満韓旅
行と言えば、旧友や旧知の人々との再会の旅、という側面
ばかりが強調されるが、かつてない体験という意味では、
漱石がこれほど多くの接客業の女性たちと遭遇した旅とい
うのも珍しいのではないだろうか。しかも漱石はそのこと
を日記や「満韓ところどころ」に包み隠さず（？）書き記
している。

その一つである旅順での体験は日記にはこのように簡潔

に記されている。

晩に田中理事の招待にて近所の日本料理店にすき焼
を食ひに行く。荒涼たる露西亞の半立の家の中に暗闇
な道路を行いて草茫茫たる空地を横切れば一軒の西洋
軒に火を点じて客を迎ふ。中は新らしく畳を敷きあ
り。酌婦が四人出て来る（『日記』一九〇九・九・一
一）。

これが「満韓ところどころ」を見ると、店の内部は西洋
家屋であるにもかかわらず、畳が敷かれてあぐらをかける
ようになっていたことや、接客した女性たちがいずれも東
京ものではなく、少なくとも一人は名古屋訛りであったこ
となどがわかる。すき焼きを前にして胃の不調に悩まされ
ていた漱石が「仕様がなから畳の上に仰向に寝て」（引
用は『漱石紀行文集』より）いると、女の一人が枕をお貸
し申しましようといって膝を差し出し、漱石も遠慮なくそ
の上に頭を乗せて寝たとも記されている。「余があまり静
だものだから、膝を貸した女は眠ったのだと思って、顎の
下をくすぐった」。帰り際には、女将が「頻りに泊って行

けと勧めた」ともあるから、これが単なる料理屋ではなく、料理旅館のたぐいであり、日記では「酌婦」と呼ばれた女たちもお酌だけが本来の仕事ではなかったことも容易に想像がつく。

ここで当時さかんに刊行された満州紀行や代表的日刊紙であった『満州日日新聞』（以下『満州日日』と略記）中の記事などに基づいて、この頃の満州の接客業界を粗描してみると、本格的な妓楼を擁する遊廓（日本人用と中国人用があり、すでに検閲制度も確立されていた）以外にも、大小さまざまな料理店や小料理屋、旅館、料理旅館などが乱立し、そこにはいろんなタイプの接客業の女性たちがいたようである。その呼ばれ方は多様だが、諸資料では、芸妓（内芸者、抱え芸妓）、酌婦（抱え酌婦）、雇婦女（やといおんな）、そして娼妓、洋娼などの呼び名があてられている。これ以外にも、仲居、女中、下女などと呼ばれた女性たちもいたが、彼女らは原則的には下働きに従事していたとみていいだろう。

東南アジア方面の「海外売春婦」の歴史は山崎朋子の一連のサンダカン娼館研究（一九七二）によって知られるようになったが、東アジア地域でも似たような現象は見ら

れたわけで、そのあたりのことについて『東京朝日新聞』記者の服部暢は次のように慨嘆している（『満州』一九一三）。

殊に南北満州を通じて特殊婦女の至らぬ隈もなき散布は、日本人の体面上、人道上、見通し難き罪悪である。南洋各地の如き日本官憲の力を以て何とも手を下し難き場所柄は兎もあれ、満州の如き地方に於て、今の状態は余りに見つとも良くない。世には娘子軍の遠征を以て邦人発展の急先鋒と賞賛する人もあるが、思はざるも亦甚しい哉、体面は利益よりも重視せねばならぬ。否、其利益と思はる点が、結局は却つて不利益の原因となる場合が多いのである。彼の如き汚辱極まる業体が如何に日本人に対する尊敬心を傷ふか、如何に日本人の正当なる発展を妨害しつつあるか。將た又異邦の下等種族に玩弄せらるる特種婦女の境遇、如何に惨憺を極むるか。心ある見聞者ならば悉く一致の觀察を下し得べき筈である。（後略）

こうした「南北満州を通じて特殊婦女の至らぬ隈もなき

散布」という目に余る状況に対して服部は、満州各地の日本官憲だけでなく、日本内地の中央地方官憲や、場合によっては「民間一般の援助」をも仰いで、取り締まりを強化すべきであると説いている。

六

ここでもう一度漱石の体験に戻り、旅順以外ではどのような体験をし、どんなタイプの接客業の女性たちとかわりを持ったかを見ておこう。

大連の次の訪問地である熊岳城温泉では、「幅一尺足らずの板を八つ橋に継だ」「満韓とどこどころ」狭い木橋の上ですれちがった野性的な若い女性が目に留まったようだ。砂の河原のなかの温泉から木橋を渡って旅館の方へ戻ろうとした時、橋の向こう側から、こっちはお構いなしに裸足で「ひらひらと板の上を舞う様に進んでくる」若い女性とすれ違ったのである。「危ないよと注意すると、女は笑いながら軽い御辞儀をして、余の肩を擦って行き過ぎた」。

この女性とは翌日駅に向かう「器械トロ」(人力式ト

ロッコ)のなかで「尻合せ」に座ることになった。口もきかず、顔もよくは見なかったが、達者な「支那語」でクリーを盛んに極め付けていたのが印象的だった。「その達弁なのは又驚く許である。昨日微笑しながら御辞儀をして、余の傍を摺り抜けた女とは何うしても思えなかった」。

『漱石紀行文集』の注解では、木橋の上での遭遇の様子や「支那語」云々からこの女性を中国人ではないかとしたが、「器械トロ」で「尻合せ」した前夜(すなわち木橋ですれ違った日の夜)にも漱石はこの女性の給仕を受けており、「洋灯の影で御白粉を着けている事は分ったが、依然として口は利かなかった」と記している。肩や尻の接触へのことさらな言及も気になるが、いずれにしても漱石が強く印象にとどめた女性であったことはまちがいない。

「器械トロ」で駅まで客たちを送った「下女」たちのなかにこの女性も加えていることから、先の分類でいえば、仲居・女中・下女のグループに含まれるとも言えるが、酌婦の側面も持ち合わせていたとみることできる。下女たちを指して「あんな摺れっ枯らしの下女」(「満韓とどこどころ」)と酷評しているのも、そうした側面も持ち合わせていたがゆえ、かもしれない。崖上にある旅館から見下ろ

すと、「廻廊」のような階段を降りて行った先に「支那流の古い建物」があり、そこは料理場と「子供を置く所」、すなわち「酌婦芸妓」のたまり場だろうと、漱石と同好者の橋本左五郎が推測する場面があり、ここがそうした女性たちも置く宿であったことがわかる。

次に訪れた営口では、旅館の主人に連れられて「女郎町」（「日記」一九〇九・九・一七）を探検している。先の分類でいえば、中国人用の遊廓である。詳しい点では「満韓ところどころ」のほうが「日記」の記述を上回っており、三人の若い女性が居た部屋（見世）を観察した際のこと、「日記」には「其真中の一人は美しくかつた。小さい足を前へ出して半分倚りかかつてゐた」とあるだけだが、「満韓ところどころ」のほうには、彼女を「驚きながら、見惚れて」いたと書かれている。「その左右が比較的尋常なのに引きかえて、真中のは不思議に美しかった。色が白いので、眉がいかにも判然としていた。眼も朗かであった。頬から顎を包む弧線は春の様に軟かった」。そして「自分程この女に興味がなかった」案内人がすぐに別室に移動したことをやや不満げに書き添えている。

最後は、湯岡子温泉の宿での不思議な体験である。より

ミステリアスに書かれているのは「満韓ところどころ」のほうだ。湯に入った帰りに大広間を通ると「其処に見慣れない女がいた」。紫の袴をはき、深い靴を鳴らして行ったり来たりする様が「学校の教師か、女生徒」のようだった。あとで下女（真正正銘の）に聞くと、「何でも宅で知ってる人なんでしょうと云った丈で、ちっとも要領を得ない」。「宅で知ってる」は「宿の抱えの」ととれなくもないが、いずれにしても彼女は「もう帰った」という。にもかかわらず、西洋間の長椅子で夕刻まで「ぼかんとして」といると、「静かな野の中でどうぞ、ちと御遊びに、私一人ですからと云う嬌かしい声でした。その音調は全くの東京ものである」。あわてて窓を開けてみると、外はすでに暮れていて「蒼い煙が女の姿を包んで仕舞ったので誰だかわらなかつた」というミステリアスな体験である。

これが根も葉もない話ではないことは、「日記」のほうにも同様の記述があることからわかる。ただし、「日記」では、記述が短だけでなく、それが「昨日の話」として、翌日の記述の中にカッコ付きで挿入されている。

（昨日の話。染付模様をきた海老茶の袴をはいた履を

穿いた女がやつてきた。ちと入らつしやい、私だけで
すからと云ふ声が聞えた。窓をあけたら曠野の中を黒
い影が見えた。何処へ行くにや)

この日、橋本らは有名な千山見物に馬で出かけ、体調の
すぐれない漱石だけが宿で一人留守番をする破目になった
ためにこうした誘いを受けたと思われるが、仮に彼女が実
在の女性だとすれば、風体からして酌婦というよりは芸
妓、それも宿お抱えのモダン芸妓、といったところあたり
がその正体だろうか。

七

このように「日記」と「満韓ところどころ」に書かれて
あることを見ただけでも、満韓旅行が、漱石としてはかつ
てないほど多くの接客業の女性たちと遭遇した旅であつた
ことがわかる。しかも、「日記」中には、隣室の客の自慢
話(芸妓を呼んでみずからの女性体験を吹聴——一九〇九・
九・一六)に裨越しに耳を傾けたことも記されており、こ
れは前述の営口遊廓や湯岡子温泉を訪れる前のことだか

ら、これに煽られた可能性だつてないとはいえない。

さらに遡れば、漱石は渡満以前にすでにこの種のこと
に遭遇するかもしれないことを予期していたフシもある。
「朝、昨夢に中村是公佐藤友熊に逢ふ。又青楼に上りたる
夢を見る」——これは渡満二ヶ月前の「日記」(一九〇九・
七・五)中の記述である。そして実際に「青楼に上」つた
かどうかはともかくとして、見てきたように、漱石の満韓
旅行は多くの接客業の女性たちと遭遇し続けた旅だったの
である。

ここで飛躍を承知で言えば、こうした体験をしてきた作
家とその半年後に、作中に駆け落ちをする酌婦を登場させ
たとしても何の不思議もない。酌婦と言えば駆け落ちが付
き物であり、『満州日日』のこの時期の紙面をざっと見た
だけでも、その種の記事はいくつも見つけることができ
る。それらの遊廓や酌婦関連の記事中で多かったのは、駆
け落ちを筆頭として、前借金踏み倒し(駆け落ちと一体
のことが多い)、無理心中、検徴逃れ、そしてこれは酌婦
とは直接関係はないが、経営者の仲介業者への周旋料踏み
倒し(にもかかわらず実際は払わなかった周旋料を前借金
に上乘せするというような悪質な例も)などだろうか。

駆け落ち記事の例としては、「酌婦奉天へ飛ぶ」(『満州日日』一九〇九・九・一四)という見出しがついた記事が挙げることができる。大連の料理店將軍樓加藤いわ方の酌婦宮崎某が、やはり同樓の酌婦であった姉を頼って今年三月に前借金百二十円で抱えられたものの、産後であったことやその後は病気であったことなどから働くことができず、薬代や衣服代などで借金だけが膨らみ、前借金は百六十九円五十五銭にまで達していたにもかかわらず、九月八日午前六時頃「無断家出」したことが報じられている。もっともこの場合は、姉やらの情報から、奉天にいる情夫(日本人)にそそのかされたのではないかとの推測で締めくくられているが、これが高じると、「情死の生存者」(『満州日日』一九〇九・九・一九)という記事―千金案(撫順炭坑の一部)の豊国方の酌婦が男と情死を企て、男だけが生き残った―にあるような結果となる。

『門』の中で御米は一度ならず二度までも駆け落ちに感じているが、前述した二つの特徴(親姉妹の不在、男性に対する物怖じの無さ)ともひとつつながりのこうした人物造型は、まさに、多くの接客業の女性たちと遭遇した満韓旅行の副産物と呼ぶにふさわしいものであったと言える。

本稿では御米の造型に絞って満韓体験との関連を見てきたが、実は、すでに諸論に指摘があるように、『門』という作品は満韓旅行の副産物だらけの小説でもあったことも忘れてはならないだろう。伊藤博文暗殺事件の噂(三の二)に始まり、学業が続けられないなら満州か朝鮮に行こうかと小六に言わせたり(三の三)、崖上の坂井の弟は満州で運送業に失敗して今は蒙古を漂流中であるとか(十六の四)、満州(奉天)に流れていった安井が坂井の弟に連れられて舞い戻ってくるとかいったように(十七の一)、満州ネタ満載の小説だったのだ。そしてその中でもより核心的なものが、御米という人物の造型だったというわけである。

八

ここで最後にもう一度、『門』という作品の読者の立場に身を置いて考えてみよう。前述したごとく、二つの特徴(親姉妹の不在、男性に対する物怖じの無さ)と安井・御米の不可解な結びつきとに基づいて想像をめぐらす限り、安井は玄人の女性である御米と恋に落ち、駆け落ちしたと

考えるほかないが、だとしても、冒頭から作品を読み進めてきた読者はそれをなんのためらいもなく受け入れることができたのだろうか。一部の読者は、満韓旅行の副産物として御米のような経歴の女性が造型された（作者側の理由）と推察できたとしても、問題は、御米の前歴が類推できる部分が後半にあり、前半の東京編では、御米はしごくまっとうな良家の奥様ふうを描かれていたということだ。

こうした、東京で宗助と隠れ棲み始めてからの、われわれに親しい御米像と、後半で明らかとなる御米の前歴とは両立不可能の関係にあるのではないだろうか。その意味では『門』は明らかに失敗作なのである。満韓旅行での見聞に基づいて姦通・駆け落ちという面白そうな趣向こそ思いついたものの、作品前半の東京時代のような御米に、（横浜）京都時代のような振る舞いができるわけではない。

ここで話は冒頭で取り上げた「特異な筋の運び」問題に帰ってくる。さらには、それは意図的だったのか、不可抗力だったのか、という問題にも。意図的と考えれば、作者は一種のミステリー・タッチを狙ったことになる。正宗白鳥流に言い直せば、激しい嫌悪を覚えるほどの作者のからくり、ということである。私も以前はそう考えていた。し

かし、徐々に、実は作者は肝腎の大事件を書こうにも書けずにズルズルと終わり近くにまで来てしまったのではないかと考えるようになった。しかし、終わりの方に持つべきだからといって、問題が解決するわけではない。前半と後半の御米像を分裂的に描かない限り、「大風」という言葉に象徴されるあの大事件は書けないのだから。そして分裂を最小限にしようとした結果として、御米に関する情報不足がもたらされたと考えることもできるかもしれない。

考えてみれば、漱石はこの種の失敗を繰り返している。『それから』でも結局姦通を描き切ることはできなかった。これは前掲社本論の言うような検閲の問題などではなく、人物像をどう描くか、どう一貫させるか、の問題なのである。姦通を犯すような人物として一貫させるか、さもなければ、姦通という趣向などはあきらめるかの二者択一なので。繰り返しになるが、作品前半の東京時代のような御米に、（横浜）京都時代のような振る舞いができるわけではない。『それから』、『門』の失敗を受けて、この難問は、『行人』、『心』、『明暗』といったその後の作品にも引き継がれていくことになる。